

長い時が創りあげた技が

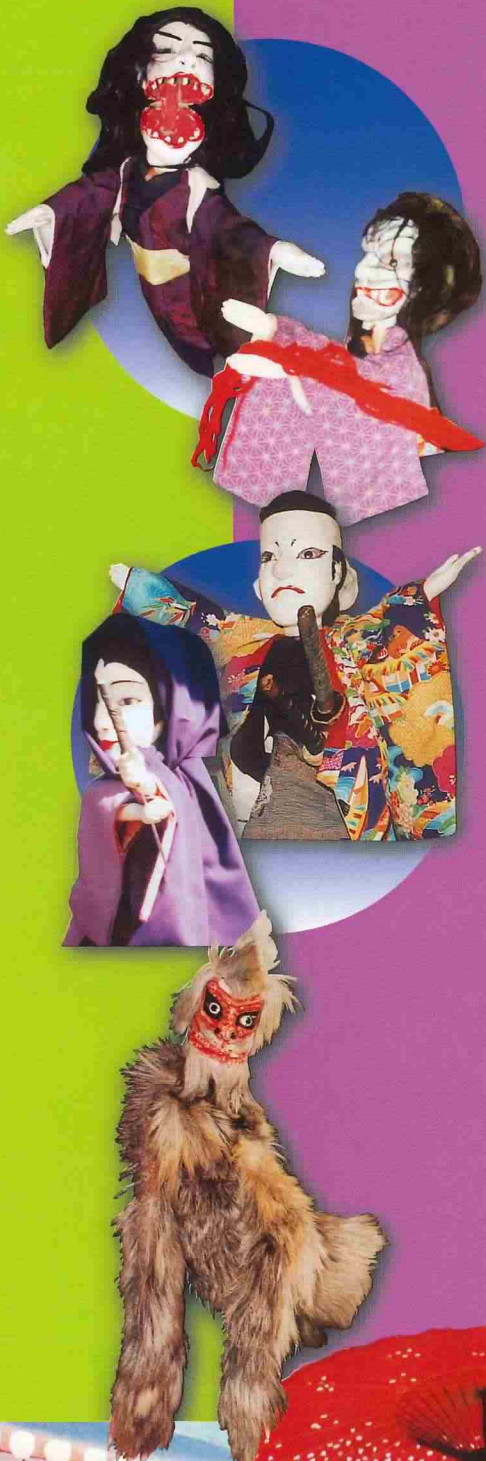
今、感動の世界へ誘う

秋田県指定無形民俗文化財

猿倉人形芝居

秋田県由利本荘市

木内勇吉一座



居芝形人倉猿

芸能の由来

猿倉人形芝居は、明治時代に秋田県由利郡百宅村（由利本荘市鳥海町百宅）出身の吉田若丸（本名・池田与八 一八五七―一九二八）が創始した人形芝居です。かつては与八人形、秋田人形、若丸の出身地にちなんだ百宅人形、活動写真に対して活動人形などとも呼ばれました。現在の「猿倉人形芝居」の名称は、若丸の弟子で活発な活動を行った吉田勝若（本名・真坂藤吉 一八七三―一九四三）の出身地猿倉（同市鳥海町猿倉）に由来します。

若丸は幼少期から横笛や三味線に才能を現し、関東の鈴売りから人形操りや囃子唄を習得した、あるいは県内の芸人から模倣したなど諸説ありますが、関東地方の人形芝居の影響を受け、また浅草の吉田文楽座に学び、吉田の芸名

を許されたといわれます。多くの人形芸が生まれた明治から大正の時代にあつて、江戸時代から続く古典的人形芸の技術を基に新時代的な独自の工夫を加えた猿倉人形芝居の基礎が明治二十年代までに創られたと考えられます。勝若や笹子村（同市鳥海町上笹子）の吉田小若（本名・丸田今朝造 一八七四―一八四三）らを弟子として本格的に興行を始め、今日伝わる猿倉人形芝居が完成したとされます。

後にそれぞれが独立、多くの弟子を育て、東北を中心に多くの劇団が生まれ、明治か



ら昭和三十年代にかけて全国各地の神社やお寺の祭典、村々を巡業し、大衆娯楽として大変な人気を博しました。

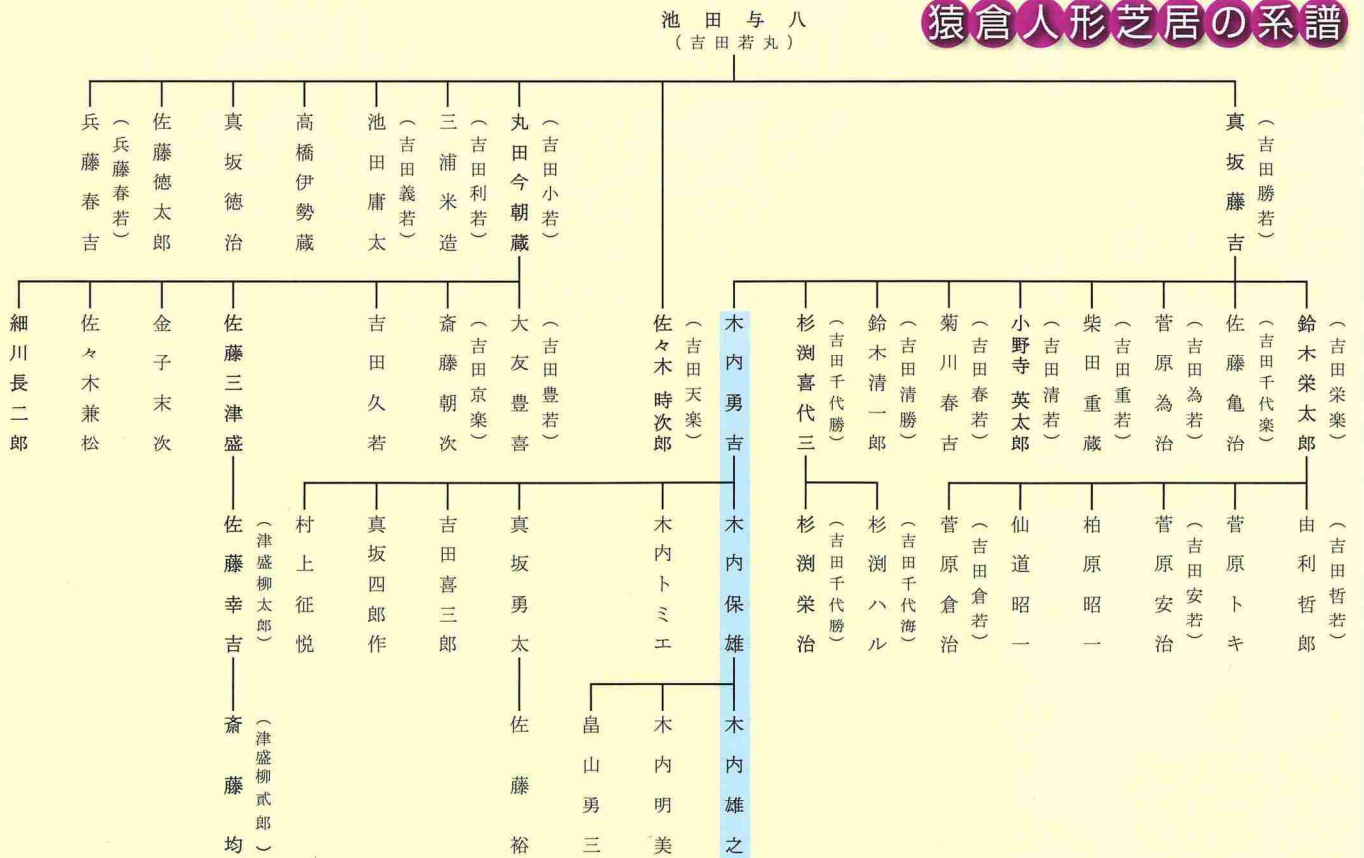
戦後、娯楽の多様化が進み、巡業基盤であった地域社会の変容などで徐々に人形芝居は下火になり、継承者も減少し



木内勇吉さんの演技

ましたが、秋田県内では勝若の弟子によって起こされた木内勇吉一座、吉田千代勝一座、鈴木栄太郎一座の三座が芸を守り続けています。昭和四十九年に秋田県無形民俗文化財に指定され、平成八年には文化庁から「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として選択されています。また、山形・岩手・青森県などでも猿倉人形芝居の流れを汲む人形芝居が活動しています。

猿倉人形芝居の系譜



※系譜について異説がある部分もある。
は木内勇吉一座の座長

芸能の特色

文楽など人形使いが表に出て演じる芸能に対し、猿倉人形芝居は「隠れ使い」といわれ、人形使いが幕の内側で人形を操ります。

人形は直接手で扱い、一体の人形を一人で操る一人使いの人形芝居です。人形衣装の裾から腕を入れ、人形カシラのノド木を人差し指と中指ではさみ、親指と小指に人形の両手をはめます（裾突っ込み



カシラと手の付け方

ハサミ式指人形)。片手に一体ずつ、両手で同時に二体の人形を操り、なおかつ木内勇吉一座では全ての役の声色を使い分けます。

この操法により可能になった素早い人形カシラの交換は、手妻操法と呼ばれ、「鬼神のお松」の七変化や次々と現れる山賊との大立ち回りなどに見ることができ、さらに人形首の自在な動きは、「鑑鉄坊さんの花傘踊り」でのコミカルな場面に活かされています。

文楽に代表される文学的で優雅な様式美とは異なり、東北生まれらしい民謡（人形甚句）の調子と秋田弁のセリフ、人形操法を活かした二体の人形による素早く激しい、



そして曲芸的なやりとりが特徴で、人形同士の対話や格闘、踊りによる活劇となっています。

舞台展開も次々と場面が変わり、ドタバタした庶民的な会話（喜劇）と講談調の重厚



な場面（悲劇）が交互に展開され、巧妙なアドリブを交え、見る者を飽きさせません。猿倉人形芝居は、当初から巡業を基本として、少人数で最大の演出・舞台効果を出せるよう工夫されてきました。人形使い一〜二名、笛・太鼓の囃子方二名程度で行います。

芝居は角材を組み立て、各



手妻によるお松の七変化

種の幕を張った舞台で演じられます（幅五呎、奥行二呎、高さ二・八呎程度）。舞台奥には演目や場面に応じた背景幕（遠見）を吊るし、芝居の進行に合わせ素早く場面を転換させます。大がかりな舞台装置を必要としないため、屋外ステージから民家の座敷まで対応でき、広く各地で受け入れられてきました。



人形芝居の演目

猿倉人形芝居の演目は、吉田若丸、吉田小若が講談本などに地方色を入れ、この人形芝居に合うよう脚色したといわれます。

公演は「三番叟」、日替わりの段物（仇討物）、「鑑鉄坊さん」の三本立で構成されます。

三番叟

三番叟は能、番楽、人形浄瑠璃にもある演目で、天下泰



平・五穀豊穰などを寿ぐおめでたい儀式曲です。烏帽子・直垂姿の人形が舞台を清めに踊り、見る者を次の出し物へと引きつけます。

鬼神のお松

伝説の悪女の話として有名な物語。女山賊のお松は、か弱いふりをして旅人を襲い金品を奪います。父を殺された仙太郎が剣術修行の末、見事に仇討を果たします。お松が血をすする場面や仙太郎との格闘の最中に、顔が美女から悪鬼の形相になっていく七変化が見どころで、手妻操法が存分に活かされています。恐ろしい話の中にも脇役たちの間抜けな会話が楽しい猿倉人形芝居の代表的な演目です。

岩見重太郎

鬼神のお松と並ぶ代表的な演目。桃山時代の伝説の豪傑岩見重太郎の物語。仇討行脚の途中、無実の罪で入牢し、牢破りした重太郎が、仙台青葉山で住民を悩ます大蛇を退治、信州松本の近くでは、村の女たちを喰らうヒトの化け物を見事退治します。巨大な化け物との壮絶な格闘の痛快さはもちろん、村人たちの滑



稽なやりとりが劇としての猿倉力がつまった演

自来

幼い孫を抱くが、不死の道具軍大夫に襲われマの妖術で有名義賊自来也と手救われますが、に討たれます。助け自来也たちすため活躍しま



大衆活居の魅

の老人の老人た怪人孫はガ使いの三太に軍大夫吉郎をを果た



弥彦利生記

闇討ちされた夫を探索する妻と従者が、弥彦峠で賊の手に落ち、息子重丸が弥彦明神から諸術を学び、母を救出、仇討を果たします。シリアスな主人公が多い猿倉人形芝居の中で、重丸はユーモアたっぷり。神様や幽霊まで登場するユニークな物語。



鑑鉄坊さんの花傘踊り

フィナーレを飾る定番。真っ赤な衣を身につけた若い鑑鉄坊さんは、実は手踊りの名人。若い娘にあの手この手で誘われ、ついに踊りを見せることになります。人形甚句に合わせて傘踊りや皿回しの曲芸が飛び出します。即興から始まった、吉田若丸のオリジナルと伝えられます。「貫徹」「貫鉄」なども表記され、意志を貫く堅物を連想させる僧侶を通じて、人間の煩惱を描き、大衆の心をとらえた人氣の出し物で、猿倉人形芝居の代名詞になっています。



木内勇吉一座

木内勇吉一座は、猿倉人形芝居二代目吉田勝若の弟子、木内勇吉さん（一八九九—一九八九）が始めた一座です。勇吉さんは勝若に弟子入り、吉

田千代勝さんらと芸を磨き、昭和初期に劇団木内興行部を創立しました。東北地方・新潟県を中心に村々を回り、東京では大規模に興行し、遠くサハリン（樺太）までも巡業しました。時代の流れとともに昭和三十年代以降巡業は減

りましたが、依頼によって随時公演を行い、また秋田和洋女子高等学校での指導など、民俗芸能の普及に努めてきました。

平成元年からは勇吉さんの長男で長年ともに活動してきた保雄さんが二代目座長として活躍し、艶のある演技で親しまれてきました。同二十三年からは保雄さんの長男雄之

（かつゆき）さんを座長に、家族で一座を構成し、猿倉人形芝居のふるさと由利本荘市で芸の継承に努めています。

現在は、毎年四月の本荘さくらまつりや十一月の鶴舞温泉での定期公演をはじめ、各地で精力的に公演を続けます。お気軽にお問い合わせください。



かつてのポスター



鬼神のお松を演じる木内保雄さん



現在の一座